

高等学校「国語表現」の教材開発に関する研究

M11EP014

矢崎 克洋

1. はじめに

「国語表現」という科目は、昭和 57 年に導入されて以来さまざまな研究実践が行われ、国語科教師に対する啓蒙活動がなされてきた。にもかかわらず国語科教師の「国語表現」に対する抵抗感や負担感は大きい。

その理由は、授業で扱う領域がきわめて広く、授業内容を決定することについて教師の裁量幅が大きいという科目の特徴にあると考えられる(表 1)。このことは、生徒の実態に即して扱う内容を選択できるという点ではメ

リットであるが、何を扱うかに関して教師が非常に大きな責任を負わねばならず、大きな負担感をもたらしている。もちろん他の科目においても、教科書の中から扱う教材を選択することは行われている。しかし、授業展開(授業をどう進めるか)を教材によって考慮しなければならない点まで含めると、他の国語科目とは明らかに一線を画す。また、教材の価値、学習効果などの検証は十分なされているとはいえない。

2. 先行研究

「国語表現」を行う上での困難性について、2002 年全国の公立私立高校の「国語表現」担当者 117 名(回答 95 名)を対象に調査した研究がある。(笠原 2009)

それによると、授業に費やした時間の割合は、「話すこと・聞くこと」13.4%、「書くこと」49.0%、「読むこと」14.7%、「言語事項」20.5%、「その他」2.4%であった。圧倒的に「書くこと」中心である。「国語表現」の二本柱の一つとも言うべき「話すこと・聞くこと」は極めて少なく、本来扱われる領域ではない「読むこと」を下回る。また、授業内容としては教科書がほとんど使われず、副教材中心の小論文・作文のトレーニングや漢字・ことわざ学習、あるいは現代文などの受験対策・就職対策が多く行われていた。

「国語表現」の時間に「国語表現とは言えない」授業が行われる理由としては、「話すこと・表現」の内容が現場の教師に不評であることを挙げている。生徒が「話すこと・聞くこと」の授業に乗ってこないと感じているのである。その一方、高校の評価は教育内容よ

表 1 : 国語表現 I の教科書内容一覧

内 容	K 出版	D 社	T 書籍	S 堂	K 書房	内 容	K 出版	D 社	T 書籍	S 堂	K 書房
声の出し方	1					手紙の書き方	1	1	1		1
会議の仕方	1					投書	1			1	
プレゼンテーション	1	1			1	文章の書き方		1	1	1	1
面接	1					修辞技法(比喩、倒置等)	1			1	
スピーチの仕方	1	1	1			推敲の仕方		1			
説明、紹介		1		1		間違えやすい表現	1				
報告、紹介					1	日本語の特徴(文法等)	1				
聞き書きを書く		1	1			古典の表現に学ぶ			1	1	1
記録の活用			1	1		自分史を書く	1				
インタビュー			1	1	1	送り仮名の付け方				1	
討論の方法			1		1	符号の使い方				1	
自己紹介				1	1	説明文					1
マッピング	1		1			要約	1				
ディベート	1	1		1	1	新聞記事の読み比べ	1				
書き言葉・話し言葉の違い					1	言葉あそび	1				1
書き写す	1					川柳	1				
メモを取る、伝える	1					語源	1				1
絵を言葉にする	1					漢字		1			
コラムを書く	1					国語の特色と異文化					1
広告コピー	1		1			敬語	1	1		1	1
語順、多義表現	1	1			1	メディアの特性を知る	1				
小論文	1	1	1	1	1	Webページを作る	1				
紙上ディベート	1					パンフレットで情報発信		1	1		
レポート作成	1	1	1	1	1	方言と共通語		1			
自己年譜	1					情報の探し方				1	1
自分史を書く	1					ミニ講演会					1

り進路実績によって決まる現実がある。学習指導要領と、現場に求められる成果との不整合というべき状況である。進学・就職率を上げるのに即効性のない科目を進学・就職率を上げるのに役立つ内容にすれば好都合という発想が、「話すこと・聞くこと」の軽視につながり、科目の目標とずれた内容が実施されることになっていた。

3. 研究の目的

先行研究や筆者自身の経験から、現場では「国語表現」の実施について敬遠されがち傾向があるといえる。しかし、社会状況が変化し、社会で求められる能力は多様化しつつある。PISA の影響を受け、学力のとらえ方も変化している。このような中で従来のような知識注入型の授業だけでは、十分ではない。ちょうど新学習指導要領の導入を控えている時期でもあるため、新学習指導要領の先行的研究も兼ねて自ら教材を作ることによって、この科目の可能性と有効性を検証したい。またそのことを通して、良い「国語表現」の教材とはどのような要素を備えているべきなのか、「国語表現」の教材の要件を導き出すことも併せて目指していく。

なお、本研究では「教材」を授業で使用する素材と、それをどのように使っていくかという授業展開の仕方の両者を包含する言葉として用いている。

4. 研究の方法

(1) 「国語表現」の授業実践

「国語表現」を担当し、研究的な教材を提案・実施する。研究対象は、A 高校「国語表現」選択者（3 年生 19 名）。ちなみに「国語表現」選択者は全部で 109 名おり、1 クラス 20 名程度の 5 クラス展開で授業を行っている。担当者数は筆者を含め 4 名。他のクラスでも、筆者の作った教材を実施する。

(2) 教材の検証

授業の成果物や「活動の振り返りシート」の記述をもとに、教材の有効性を検証する。

(3) 効果的な教材モデルの案出

実施した活動内容を分析し、教材に必要な要件を導き出す。

5. 研究の結果と考察

(1) 提案・実施した教材

- a 「学校を紹介するパンフレット」6～7 月
(昨年度連携協力校で実施した内容を踏襲)
- b 「同級生の推薦文」→ 10 月
- c 「お気に入りの品の紹介」→ 11～12 月

(2) 教材の概要と活動の成果→表 2 参照

(3) 「国語表現」教材に必要な要素

「学校を紹介するパンフレット」と「同級生の推薦文」を実践して、生徒の様子や成果物などからこれらの教材が有効であることがわかった。そこでこれらの授業から、効果的な「国語表現」の授業モデルを帰納的に考えてみた。図 1 は、「同級生の推薦文」の活動を例に示したものである。左側が実際の活動で、それをもとに効果的な授業の要素（右側）を導き出した。

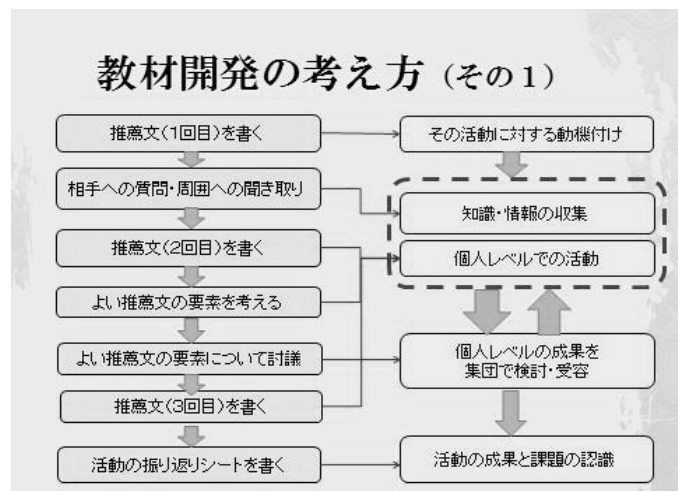


図 1 具体的活動から教材の要素を考える

表2：開発した教材の概要と活動の成果

	a「学校紹介パンフレット」	b「同級生の推薦文」	c「お気に入りの品の紹介」
教材のねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・書くことの動機付けができる。(書くという行為→他者への伝達) ・取材活動(情報収集)の重要性を認識できる。 ・多様な表現スタイルを利用できる。(生徒の工夫の余地が大きい) 	<ul style="list-style-type: none"> ・読み手を意識して書く経験となる。 ・同級生の良い点を改めて知ることができる。 ・「学校紹介パンフレット」ではできなかった生徒ひとり一人の評価ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「話すこと・聞くこと」の活動を行うことができる。(プレゼンテーション) ・「学校を紹介するパンフレット」、「同級生の推薦文」双方で学んだ要素を盛り込めるため、今年度の集大成とすることができる。
活動内容及び配当時間	<p><1時間目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動のねらいの説明を聞く。 ・グループ分けの指示に従い、メンバーの顔合わせを行う。 <p><2時間目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・マッピングメモで記事のアイデアを出す。 ・記事の選定をする。 <p><3時間目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・良いパンフレットの条件を考える。 <p><4時間目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・リード文について学び、書いてみる。 <p><5～8時間目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・パンフレットの作成。 <p><9時間目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・作品を見て、相互に評価コメントを書く。 <p><10時間目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・評価コメントを読んだ上で、活動の振り返りシートを書く。 	<p><1時間目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動のねらいの説明を聞く。 ・推薦文(1回目)を書く。 <p>・どのような情報があるともっとよい推薦文が書けるかを考え、本人への質問事項を考える。</p> <p><2時間目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分に対する質問用紙に回答する。 ・他者への聞き取り調査と、相手本人からの回答をもとに、推薦文(2回目)を書く。 <p><3時間目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・推薦文(2回目)を読み合い、よい推薦文の条件を考える。 <p><4時間目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・前時の「よい推薦文の条件」をもとに、自分の書いた推薦文(2回目)を評価する。 ・一連の活動の振り返りを行う。(シートの記入) ・推薦文の清書(最終回)をする。 	<p><1時間目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動のねらいの説明を聞く。 ・紹介したい品の候補を3～5個考える。 ・全員の前で候補の品を発表し、一番興味を持ったものに挙手してもらう。 ・紹介する品を決定。 <p><2時間目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「よいプレゼンテーションの条件」を考える。 ・付箋に書いてグループで持ち寄り、共有化する。(用紙に貼って類型化を行う) ・自己の活動目標と達成基準を考える。 <p><3時間目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・前時に考えた「よいプレゼンテーションの条件」をグループごとに発表する。 <p><4時間目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表準備(原稿、パネル等作成) <p><5～7時間目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・プレゼンテーションを行い、聴く側は評価コメントを書く。(ビデオで記録) <p><8時間目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の発表に対する評価コメントを読む。 ・発表ビデオを見て、自分のプレゼンテーションの様子を知る。 ・活動の振り返りシートを書く。
活動の成果(生徒の記述から)	<p>授業を受けて改めて感じたのは、作り手が読み手の立場に立ってパンフレットを作ることの大切さ。作り手が載せたいものだけを載せていても、読み手のニーズには応えられない。パンフレットは手に取ってもらうのが勝負なんだということも感じた。中身がいくら良くても、見てもらえなければ意味がない。読み手の興味をいかに引いて、飽きさせないかが大事だと思った。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・悪いところが目につきやすいが、良いところを探そうとするようになった。 ・自分はどのように人に映っているのか、それぞれ知ることができるいい機会だった。 ・人の夢を知ったことで、自分一人が頑張っているのではないと知り、切磋琢磨しようと思うようになった。 ・自分の夢をみんなに知ってもらったことで、より一層夢の実現に向けてやる気が出た。 	<ul style="list-style-type: none"> ・アドバイスをもらうことで、自分の発表で足りないものがわかった。 ・自分のプレゼンをビデオで見て、もっと明るくしゃべった方がいいと思った。 ・映像を見て、自分の声の聞き取りにくさがわかった。 ・聞いている人がよいところと改善点を考えるところがお互いのためになっていい。 ・質問を受けて、とっさの時の対応力を高められた。 ・今後の社会生活に役立つ授業だった。

①活動に対する動機付け

まず必要なのは、「その活動に対する動機付け」である。何のためにするのか、それを行うことがどういう意味を持つのかなどについての意識を、あらかじめ生徒に持たせることが重要である。「面白そうだ」とか「やってみよう」などの気持ちにさせることがその後の活動を支えることになり、ひいては授業の成否に影響を与えるからである。

ところで教材には、それを行うのに適した時期（または適さない時期）がある。実施に当たっては、このことを考慮すべきである。

今年度の例では、「学校を紹介するパンフレット」は6～7月にかけて行った。本校では、7月末に中学生とその保護者を対象とする学校説明会がある。公式のパンフレットはもちろん配布するが、それとは別に「生徒の視点での紹介パンフレット」を作ろうということを経験すると、生徒の受け止め方も現実味を帯びたものになる。

また、「同級生の推薦文」は9月に行った。この時期は、高校3年生にとって推薦入試の校内選考や出願書類の用意をする時期である。

「推薦書」という言葉に生徒は敏感になっている。クラスメートの推薦文を書くことによって、「推薦書」を書いてもらうには、どういう要件を兼ね備えた人物であることが望ましいかということを考え、それが残りの高校生活に活かされることを期待した。結果は、そういうことに気付いただけでなく、同級生への理解が深まったり、推薦書を書く担任への感謝が生まれたりという効果が見られた。

②知識・情報の収集、個人での活動

「知識・情報の収集」は、その活動を行う上で必要な知識を獲得したり、生徒自ら調査などを行ったりすることである。講義形式の授業でも対応できるが、その場合も生徒が主体的に取り組むような工夫が望まれる。そし

て次の段階として、生徒各自による「個人レベルでの活動」が求められる。「学校を紹介するパンフレット」では、成果物がグループで作るパンフレットのみだったため、個々の生徒の評価がしにくいという難があった。もちろん集団での活動の有効性はあるが、それだけでは不十分で、集団での活動と同等あるいはそれ以上の個人レベルの活動が必要である。個人で考えたり活動したりすることがあってこそ、集団レベルの活動も意味を持つ。「同級生の推薦文」では、個人での活動を増やし、個々の評価ができるようにした。(図2、3)

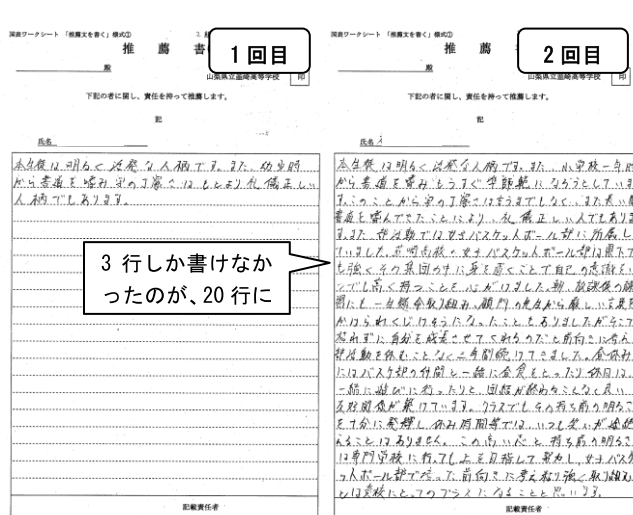


図2 生徒Aの推薦文（左：1回目、右：2回目）

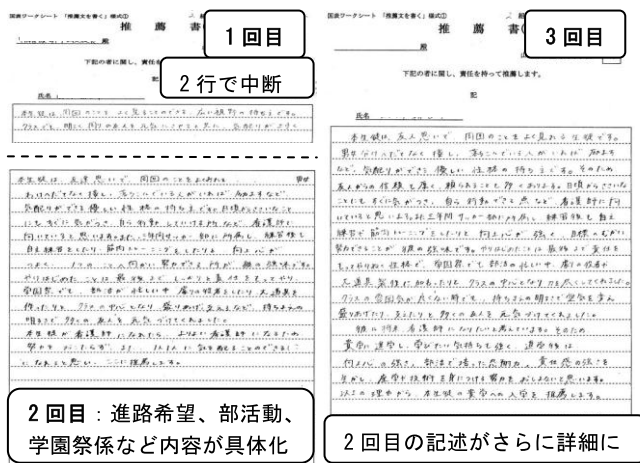


図3 生徒Bの推薦文
(左上：1回目、左下：2回目、右：3回目)

③個の検討から集団への練り上げへ

「国語表現」では「話すこと・聞くこと」が大きな要素となっている。その力を高めるのに欠かせないのが、発表のような集団を利用した活動である。もちろん今までも、話し合いや発表は、重要な活動としてとらえられてきた。ただ、それは単独の活動としての受け止めであり、話し合いをすることや発表をすること自体が目標になっていた部分がある。

今回の研究では、個人で考えたり記述・作成したりしたものを集団(他者)に投げかけ、そこでの反応や評価を再び個人レベルの活動にフィードバックするという流れが重要だと考えた。この過程を通して活動内容の質的な向上が図られると同時に、「話すこと・聞くこと」の力が養われる。さらに、集団(他者)の存在が活動に緊張感をもたらす効果もある。

「個人レベルの活動」を他人の前に提示するため、主体的に取り組むようになる。



図4 卒業生向け記事のマッピング

図4は「学校を紹介するパンフレット」において、パンフレット記事のアイデアを出し合ったものである。自分一人ではあまり思い浮かばなくても、他人の考えたことをきっかけとしてアイデアを増やしていくことができる。その結果、豊富なアイデアの中から記事を選定することができ、よいパンフレットを

作ることに繋がった。また、「同級生の推薦文」では各自で考えた「よい推薦文の条件」

表3：生徒たちがまとめた「よい推薦文の条件」

- | | |
|---|---|
| ① | 一番伝えたいことがしっかりと伝わるように書く。 |
| ② | 夢と志望先とを結び付ける。 |
| ③ | 高校で培ったものを志望先と結び付ける。 |
| ④ | できるだけ多く書くこと。 |
| ⑤ | 字は丁寧に書く。人が丁寧な人の推薦書は読みたくなる。 |
| ⑥ | 勉強や、部活動以外のこともあると良い。 |
| ⑦ | 書く視点は多面的である方がよい。 |
| ⑧ | ありきたりの Word は使わない。「まじめだ」「努力家だ」など誰にでも書けそうなことは書かない。 |
| ⑨ | 文末は断言する。「～はず」「～だと思う」というような言葉は使わない方がいい。 |
| ⑩ | 長文より短文の方が分かりやすい。 |
| ⑪ | 本人が志願理由書で書くようなことは避ける。 |
| ⑫ | なるべく具体的に書く。実体験、実際のエピソードがあると分かりやすい。 |

を4人ほどのグループで持ち寄り、一番重要だと考えたもの(他のグループに言われていないものの中で)を発表させた。それをまとめたのが、表3である。

ただし、この活動では他人の考えを取り入れて新たなものを創造するという点が十分とは言えない。そこで「お気に入りの品の紹介」では「よいプレゼンテーションの要件」を各自に考えさせ、1つずつ付箋に書いたものを

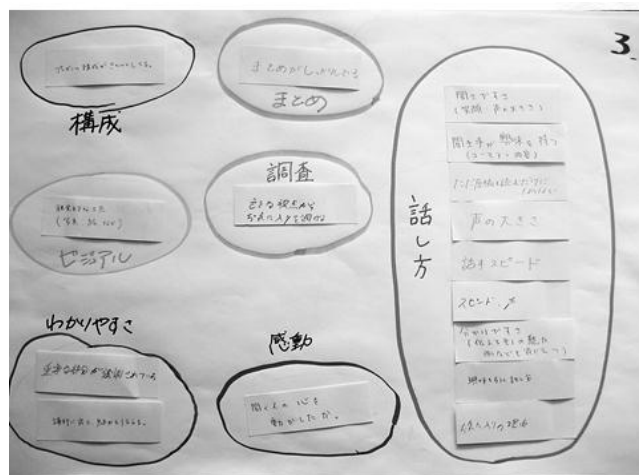


図5 よいプレゼンテーションの要件(3班)



図6 よいプレゼンテーションの要件(2班)

持ち寄って類型化し、そこから言及できる重要な要素を発表させた(図5、6)。個人の考えたことをグループで集約し、新しい形で提示するので、集団の活用がより高まった。

④活動の振り返り

一連の活動の最後は、「活動の振り返りシート」を書かせ、生徒自身に収穫や課題を明確にさせる。生徒は、書くことによってそれらを認識するのである。また、教師がどんなに良い授業をしても、生徒にその認識が生じなければ良い授業とは言えない。振り返りシートは、生徒にとってその教材や授業はどうだったのか、教師に対する評価の役目も果たしている。

なお、振り返りシートは単なる感想を書かせるのではなく、書いたものを生徒自身が見ることによって成長感、達成感などを得られるような工夫が必要である。図7では、「学校を紹介するパンフレット」で、学習の前後で認識がどう変化したかを見て取れる様式を示した。

授業前		授業後
<p>○良いパンフレットの条件は、どんなことだと思いますか。箇条書きで、できるだけたくさん書いてください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 文だけでなく、絵や写真が入っている。 • 読み手が必要なと思われる情報を載せる。 • デザインなどにこだわって、学校の雰囲気を伝える。 • あり細かくはない。 • 見やすい。 • 分かりやすい。 	➔	<p>○良いパンフレットの条件は、どんなことだと思いますか。箇条書きで、できるだけたくさん書いてください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 読み手がどんな人かを考える • 見やすい(レイアウト) • 読み手が取りやすいタイトル、ワード文 • 学校の雰囲気や特徴をわかりやすく伝えるための写真 • 必要な情報を簡潔に、分かりやすく • 図や表を使う • シンプル • 表紙を引く • スペース上手に使う • 見やすいデザイン • 生の声(生徒や先生) • インパクト • 文章が必要
<p>授業を受ける前と授業を終えた後を振り返って、何がどのように変わりましたか。そのことについて、あなたはどのように思いますか。考えたこと、感じたこと、感想など何でもかまいませんから自由に書いてください。</p> <p>授業前は見やすさを重視し、あり文章は必要ないと考えていた。情報をきちんと伝えるために、必要な情報は載せた。パンフレットのデザインにもこだわった。インパクトが強い読み手が必要という点に気づいた。デザインや写真にあり重視していた。デザイン、色、写真、パンフレットの内容を見ても、大抵は良かった。</p> <p>読み手は、学校の受け取り手が分かる。伝えることの意味を大きく感じた。この活動は、グループで作ったものが良かった。今後のコミュニケーションに役立てたい。</p>		

図7 「学校紹介パンフレット」振り返りシート

「お気に入りの品の紹介」では、生徒自身に各自の活動目標（図8）と、達成基準（何がどういう状態になったら目標が達成できたと考えるのか）（図9）を考えさせたため、振り返りシートにそれを反映させるようにした。

<活動の目標>（書き方：「～ができるようにする」、「～を強化する」、「～について深める」）

- ・原稿を語るだけでなく、「伝える」という意図をもとに発表できるようにする
- ・より深く調べ、原稿のいことまで伝えられるようにする
- ・原稿のバリエーションの作成に力をいれる

図8 活動目標

<活動目標に対する評価項目・手段・基準>

評価項目	評価手段	評価規準（到達目標）
プレゼンテーション全体	プレゼンテーションをしている時の姿勢や声の大きさ	下を向いて読んでいる人がいない、開いている人の顔を見てプレゼンテーションできている 目標達成
プレゼンテーション内容	分かりやすい内容なのか、細かく調べられているか	みんなが興味を持てる内容について、少しでも初めを伝えられる 目標達成
バリエーションの完成度	プレゼンテーションに合ったバリエーションを作成できているか	バリエーションを見てプレゼンテーションがより分かりやすくなるように 目標達成

図9 評価項目、手段、基準

(1) 自分が設定した活動の目標>（様式2）（「～ができるようにする」、「～を強化する」、「～について深める」等）について、目標の内容が適切だったか、及び達成状況を簡潔に書いてください。

- ・「伝える」という意図を持って書いたけど、原稿に目がいけなかったから、改めて書いた。その時、みんなは私の気持ちか伝わったか分かった。
- ・ヤセインゴの特徴では、私の思うかいい点を伝えられたからよかった。
- ・写真は「お気に入り」のところに貼りました。

図10 振り返りシート（1項目目）

今回の活動を通して、良かった点及び今後の課題となる点を書いてください。

- ・私も生き物では、みんなと同じように思っていたから、比較しやすかったのかなと思った。
- ・もっと準備をちゃんとしてあげれば、みんなもインゴについてもっと興味を持ってもらえるかなと、みんなの興味をもっているものか、何か知れるかなと考えた。
- ・プレゼンテーションをするにあたり、構成が大切だと気がついた。
- ・全体的に、みんな発表できていた。

図11 振り返りシート（2項目目）

今回の活動を通して、自分が成長できたことや変化したことなどがあつたら書いてください。

- ・自分の女子き「お気に入り」の品に決まらなかったのがよかった。
- ・プレゼンをするのは大変だった。
- ・原稿の書き方を少し克服できた。
- ・今後の社会生活に役立つ授業だった。
- ・映像を見て、自分の声の大きさを意識することができた。

図12 振り返りシート（3項目目）

ここまでの考察で、おぼろげながら望ましい「国語表現」の教材モデルが見えてきた。そこで、このモデルをもとに次の教材として考えたのが、教材「お気に入りの品の紹介」である。「個人→集団→個人」という活動をできるだけ増やそうとした結果、図13の右側に示したような活動内容となった。「発表する品の候補について、聞き手の関心の度合いをつかむ」「よいプレゼンテーションについて討議」「プレゼンテーションに対する質問・評価コメント」の3つの部分がそれぞれにあたる。この結果「話すこと・聞くこと」の活動量が非常に豊富な教材とすることができた。

教材開発の考え方（その2）

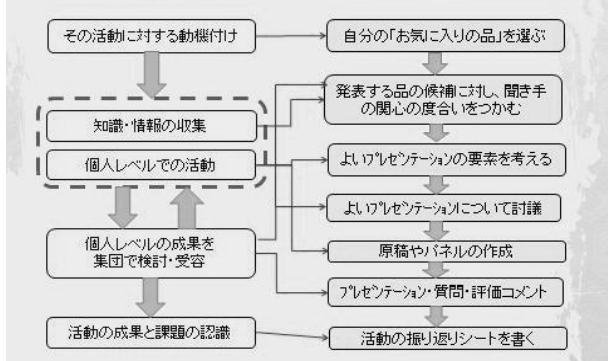


図13 教材の要素から具体的な活動を考える

6. 今後の課題

今回の教材モデルは、十分な数の教材をもとに考案したものではない。また、これが唯

一の「国語表現」教材モデルとは限らない。前述したように「国語表現」の扱うべき領域は非常に広い。さらに生徒の実態まで考慮に入れば、求められる教材は多種多様だといえる。したがって、今回導き出した教材モデルは一つの参考にとどめ、さらに効果的な教材を考えることが必要である。

また、「お気に入りの品の紹介」では、活動目標と目標達成の基準を生徒各自に考えさせてみた。通常の授業においてこれらは教師が設定し、生徒は一方的に受け入れる状態である。しかし、生徒が主体的に学ぶためには、その教材や単元で何を目標とするのか、そしてどのような状況に達したときその目標は達成したと判断するのかをあらかじめ考えさせることが有効ではないだろうか。残念ながら今回の活動ではこれをうまく機能させられないまま終わってしまったが、教師と生徒が目標を共有できれば、それは主体的な学びにつながっていくと考える。よりよい教材の追求と共に、この点も研究していきたい。

7. おわりに

この研究を通して、「国語表現」は社会で必要とされる国語力を学ぶのに有効な科目だということが確認できた。ただし、社会で必要とされる国語力は社会の変化に連動して少しずつ変化している。また、それを学ぶ生徒も多様である。従って、社会状況と生徒の実態にしっかりと目を向けながら、よりよい教材を追求していく姿勢が授業者には求められる。

PISA の学力調査結果は、わが国の教育現場に大きな影響をもたらした。OECD の DeSeCo プロジェクトは、その PISA 調査の根拠となっているもので、そこでは「人生の成功と正常に機能する社会の実現を高いレベルで達成する個人の特性」を「キー・コンピテンシー」とし、その概念を3つのカテゴリーに具体化した。(表4)

表4

①社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力
②多様な社会グループにおける人間関係形成能力
③自律的に行動する能力

21世紀は知識基盤社会の到来と言われている。資源を加工してものを生産し、それによって利益を生み出してきた従来の社会構造が、知識を創造し活用することで利益を生み出すように変わってきた。高等学校の場合、生徒はこの「知識基盤社会」と、卒業後すぐに向き合っていかなければならない。とすれば、このキー・コンピテンシーの概念をどのような教材や授業で具体化していくかということが、これからの高校教育の大きな課題になる。「国語表現」にはそれを具体化できる可能性があるし、十分な効果も期待できる。

今回自分なりに教材を工夫して行った授業では、想定していた以上の反応を生徒が示してくれた。活動の振り返りシートには、「(学んだことが)上の学校や社会で役に立つと思う」といった記述が数多く見られた。生徒はこの科目を肯定的にとらえている。冒頭で述べたようにこの科目に対する教師の負担感は大いなものがあるが、「国語表現」という科目の必要性は高まっており、その活用を積極的に進めていく時期になっていると考える。

8. 参考文献

ドミニク S ライエン、ローラ H サルガニコ (編著) 立田慶裕 (監訳) (2006) 『キーコンピテンシー 国際標準の学力を目指して』 明石書店

笠原美保子 (2009) 「転用される『国語表現』—高等学校国語科に『話すこと・聞くこと』指導が根付かない理由—」 『国語科教育』 65号

鳴島甫、高木展郎 (2010) 『高等学校新学習指導要領の展開 国語科編』 明治図書